ロキ・ファミリアに妹との再会を求めるのは間違っているだろうか

非常食の大勝利！！

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

衛宮士郎が英雄王を纏ったアンジェリカに乖離剣エアで吹き飛ばされた先は真っ白な所だった。

「君を愛する妹、美遊ちゃんの所へ連れて行ってあげるよ」

誰か分からなかったが、もう一度美遊に、妹に会えるならそれを望もう。

そこからさらに衛宮士郎が飛ばされた場所は、紛れもない異世界だった!!

始めまして。非常食の大勝利!!と申します。

これは、「劇場版Ｆａｔｅ／ｋａｌｅｉｄ　ｌｉｎｅｒ　プリズマ☆イリヤ　雪下の誓い」と「ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか」のクロスオーバーになります。

早くプリヤ五期とダンまち二期が、劇場版が早く観たいな～、なんて思ったのが発端です。

アンジェリカと戦い、乖離剣エアで吹き飛ばされる所から書き始めます。

注意事項

１：不定期更新となります。ご了承ください。

２：ベル君も登場させますが、少なくなると思います。

３：細心の注意を払いますが、万が一誤字脱字がありましたら教えてもらえると助かります。

上記が問題無い方は本編へ!!

追記

タグに「ヒロインはアイズ」と書きましたが、どうも土郎君にはハーレムしか似合わないので新たに「ハーレム」としました。

２０１９年　２月１７日

目　次

プロローグ ―― 1
全ては美遊の為に ―― 7
単純明快 ―― 11
豊饒の女主人 ―― 13
再開と再出発 ―― 16

プロローグ

「美遊がもう苦しまなくていい世界になりますように」
「やさしい人たちに出会って――――
笑いあえる友達を作って――――
あたたかでささやかな――――
幸せをつかめますように」
兄の衛宮士郎はそう願った。
たった1人の妹を攫われ、たった1人の親友に裏切られ、たった1人の後輩を目の前で殺されながらも戦い続けた。
この一つの願いの為に。
今、衛宮士郎がやっている事はただの時間稼ぎ。
自分が生き残る為でなく、妹を逃がす為の時間稼ぎ。
「貴様の存在は既に破綻している。我々の綴る在来人類最後の神話にとって貴様は汚点になりかねない。その忌々しい能力も、不可解な魔術行使も、死人めいた悍ましい信念も。全てを切り裂こう、貴様の世界ごと」
何処からともなく取り出したいびつな形をした宝具は投影不可能。
でもやる事は変わらない。
「あぁ。それに見合う剣なんてこの世界の何処にも無い。だから、無作法で悪いが・・・返礼は、俺の全てで、変えさせてもらう!!」
固有結界からありったけの投影宝具を集め迎え撃つ。
「原初に帰れ、天地乖離す開闢の星(エヌマ・エリシュ)!!」
「う…オオオオ!!」
全ての投影宝具を飛ばす。
投影宝具が風圧で潰され、髪の一部と顔の一部が侵食される。
「無駄だ!例え全ての剣を束ねたとて、究極の一には届かぬ!!」
飛ばした投影宝具の大半を打ち出し、士郎は穏やかな笑顔でこう言う。
「そうだ…たった一つが全てを上回る事だって、ある」
風圧で飛ばされながら、大事な事に気付いた。

ようやく――わかった
ずっと自分を支えてくれてたのは
『戦うための魔力
を送ってくれていたのは――』
――美遊だったんだ
「大丈夫だよな美遊　きっとお前なら　すぐ友達もできるさ」
「もっともっと　色んなことを……教えてやりたかったな」
「あ……そういや」
「海に連れてくって約束　忘れてた」
「まずいなぁ……怒ってるかな美遊　怒ってるよなぁ…」
「……まぁでも　俺もちょっとはがんばったし」
「許してくれよな」
美遊との約束を思い出しながら意識が遠退いていった。

気が付くと、真っ白で殺風景な空間にいた。
身体が金縛りにあったみたいに動かない。
幸い口は動かせたので声を出す事が出来た。
「誰か、いないか？」
すると、「勿論いるけど？」
後方から声が聞こえる。
声のトーンからしてエインズワースの連中ではないようだ。
「悪いが身体を動くように出来るか？話しがしたい」
身体が動かないのであればどうしようもない。
「了解！まぁ僕もそうしたいのが本心だからね！」
どうも、相手は軽い感じの奴だ。
途端、すぐ身体が動くようになった。
「取り敢えず、ここは何処なんだ？」
返事はすぐに帰って来た。
「ここは死後の世界だ」
これとなく察していたが、やはり。俺はあの宝具で吹き飛ばされて死んだのか。

「それで…美遊は？妹は無事なのか？」
　それが聞きたかった。
「勿論！優しいお兄さんのお陰でとりあえず一ヶ月無事に過ごしているよ！」
「そうか…」
　それだけ聞ければ満足だった。
　ん？待てよ…。
「って、一ヶ月!?俺が死んで一ヶ月経つのか!?」
「いや、正確には君が死んだのがついさっきで、美遊ちゃんがあっちの世界に行って一ヶ月経つんだけど…どうも時間の進みが速いみたいで…」
「そうなのか…皮肉な物だな…」
　そう思ったのも束の間、いきなりデカイ声が飛んで来た。
「さぁ！そこで聖杯である僕からの提案だ!!君を愛する妹、美遊ちゃんの所へ連れて行ってあげるよ！だってもう一度会いたいだろう？」
　それは、叶うのならば美遊に会って話がしたい。美味い物を作って上げたい。笑って、泣きたい。
　聖杯と名乗る男の声は続く。
「今、美遊ちゃんがいる所はファンタジー系にそっくりなてかほぼ異世界だな。その世界の中心部の【オラリオ】ってとこなんだ。そこの【ロキ・ファミリア】の一員としている。周りの仲間達に可愛がって貰ってるよ！」
　ロキ・ファミリア…オラリオ…。
　出てきた単語を頭の中で整理する。
「そこに行けば美遊に会えるんだな？」
「あぁ…、そうだよ。君の戦闘技能と経験はそのままにしてあげる。様は記憶だね。あと、英霊エミヤによる侵食は完全に消すのは無理だ。だけど今の状態で止めてあげられるから、幾ら投影しようが固有結界を張ろうが身体への影響はなくす事ができる。姿はそのままで転生だ!!どうだろう？」
　こんな話、信じていいのか…。でも、もう一度美遊に会えるなら。

あの笑顔がもう一度見れるなら。
答えを出すのに余り時間が掛からなかった。
「頼む…もう一度、美遊に会わせてくれ!!」
これが俺の出した答え。
「君がそう言ってくれて良かった。じゃあ行ってらっしゃい!!また会えると思うから!あ、ボロボロの服は修繕して、侵食された腕と顔の一部に包帯しておくからね!!」
(ありがとう…)
声はでなかったが、心から感謝しながら俺の意識は再び遠退いていった。

「…ここは?」目覚めると右眼しか見えない。肌に触れる服は修繕されていて、袖から出た左手にも包帯が巻かれている。
その直後、俺の視野に拳が見えた。
「ーッ!」なんとか避け、間合いを取る。
殴ってきたのはまるで狼を擬人化した様な男だった。
「オイ、お前、何処のどいつだ?」
男は俺に疑問を投げ掛けた。
「それはこっちの台詞だ。いきなり殴り掛かって来て何言ってる?」
「ケッ、包帯野郎に名乗る名前なんてねぇ。家の前にいる不審者は容赦しねぇ」
後ろには大きい洋風の屋敷がある。恐らく男は横の屋敷に住んでいるだろう。戦わなければ、殺される。

「俺は不審者じゃない。妹を探してるだけだ。戦うつもりは無い」
「妹だぁ？名前は？」
　男はまた疑問を投げ掛けた。
「美遊って言ー」最後まで言わせてくれなかった。とてつもない衝撃が俺の左の頬を襲った。
「ーガッ！」殴られた衝撃と吹っ飛ばされた衝撃が俺の背中を叩きつけた。
「ハハ…最後まで、言わせてくれないとはな…」俺はゆっくり立ち上がる。
「ミユのチビに兄がいるなんて聞いた事がねぇ…てか包帯野郎、なんで動けてんだよ!!」男は目を見開いて驚いていた。
　殴られる寸前に反射的に左の頬を強化していたから少し背中が痛いな程度で済んだ。けど顔の包帯が緩んでいて、もう取れかかっている。
「美遊の事を知っていることは…お前、【ロキ・ファミリア】の連中か…」
「お前何者だ？」怒りの篭った口調で言う。
　無論「別に、タダの英霊の紛い物さ」と言っておいた。
　男は再び拳を構えた。
　多分俺を殺す気なのだろう…。
　ならばこちらも殺す気でやらなければ。
「投影（トレース）・開始（オン）」
　生前使っていた二振りの夫婦剣、干将・莫耶を創り出し、胸の前で構えた。
「なんだ？オイ包帯野郎、お前魔法使いか？」
「正確には魔術使いだな」
　両者共に気を張り詰めていた所、「ベート！貴様何をしている！」
　ふと振り向くと、本とかでよく見かける美人。エルフがいた。
「るっせーな、リヴェリア！観ての通り悪人退治だよ！」ベートと呼ばれた男はエルフに対して反論した。
　そのエルフの後ろから小柄な子が出て来て俺は目を見開いた。

紛れもなく、

美遊だった。

「お、お兄、ちゃん？」

「美遊！」

ベートとリヴェリアはその間唖然としていた。

ベートとリヴェリアが驚きの声を挙げたのはその直後だった。

全ては美遊の為に

「お、お兄、ちゃん？お兄ちゃん!!」
「美遊！やっと…やっと会えた。ゴメンな、また一人にして…」
「「エェーー！」」
　俺は再び妹との再会を感動の余り涙を流し、叫ぶ二人に目も暮れず妹に抱き着かれながら立ち尽くしていた。
　美遊に抱き着かれてから数分経った時だった。
　美遊の前に居たリヴェリアと言われていたエルフが口を開いた。
「あー、再会に水を差すつもりは無いのだが、君が、ミユの兄なのか？本当にそうだとしたら今まで何処に？」
「それを話していると長くなる。で、その前にこの狼…いや、そこの駄犬はまだ俺を殺す気みたいだが？」
　美遊とリヴェリアはすぐにベートの方を見た。
　ベートは今にも士郎を殺しかねない殺意を纏っている。
「俺はテメェを…テメェのその腐った神経を性根から叩き直してやる…」
　ベートが言った事は冗談ではない。それは誰が見ても分かる事だ。
「ハッ…そうだろうな…確かに俺は腐っているかもしれない…だが、この場で戦うのは良くないと思わないか？」
　ここは民家が並ぶ街。
　流石に殺気を纏っていた駄犬は矛を収めた。
「ケッ、クソが！」
「まぁ、私は君の話を聞こうと思っている。ここで話すより屋敷で話す方がよかろう。」
「私も異議はないです。リヴェリア様。」
「ナッ、ざけんｎ…」
　駄犬の言葉を遮る様に今度は美遊が殺気を纏った。
「ベートさん、貴方の意見は聞いていません。あ、お話の間は私の魔法弾の実験台となってくださいね？恐らく上手くなったと思いますので」

「ミユも程々に、だぞ」
「分かりました」
　こうして一行は屋敷内に入った。

「まぁ掛けてくれ。紅茶を入れよう。それともう一人呼ばなければ…」
「もう一人？」
　俺はソファーに腰を掛けた。
　待つ事三十秒余、一人が部屋に入ってきた。
「なんや～リヴェリア、急な客人て～」
　聞き覚えのある方言。そう、関西弁だ。
「ほら、そこのソファーに座っている青年だ。」
「青年!?、リヴェリアが男を連れて来るなんて…なんやなんや？明日は雨でも降るんちゃうか？」
　現れたのは緋色の髪をポニーテールにし、眼は極端に細く、露わになる腹部は綺麗なボディラインを表している。
　恐らく、彼女がロキ・ファミリアの主神。【神・ロキ】なのだろう。
　ならばこちらから挨拶をするのが礼儀だ。
「初めまして、美遊の兄の衛宮士郎です。神・ロキ。妹が世話になっている。」
「エッ、自分がミユの兄!?ウソや！マジで言っとるんか？こっちも名乗っておこか。ロキや。あー固っ苦しい言葉はイヤやから別に敬語は使わんでエエで」
「私はリヴェリア・リヨス・アールヴよろしく頼む。シロウ君」
　簡単な自己紹介をした後すぐに口を開いたのはリヴェリアだった。
「まぁ、聞きたい事は山ほどだが…まず、その包帯を取って貰えるかな？」
「分かった。その方が話も進む。悪いが上着だけここで脱がして貰うぞ」
　それだけ言って顔の包帯を取り、着ていた上着を脱ぎはらりはらりと包帯を取った。バランスと肉付きの良い体と醜い左半身が露わに

なる。
「自分、それは何なん？火傷じゃあないやろ？」
「あぁ。英霊って分かるか？」
「簡単に言うと英雄が死んだ後に具現化した者やろ？まさかだと思うが自分…」
「その通り。至るかもしれなかった未来に別世界の俺がなった姿。英雄エミヤに侵食された痕だ」
二人は俺が言った言葉に唖然としていた。
「英霊に侵食？そんな事が…どうしてなんだ？何故君はその英霊エミヤに侵食されたのだ？」
「それは聞きたかった所や。教えて貰おか？」
俺は二人に前世の事を話した。
自分が災害で両親を失くしたところで一人の男が助けてくれた事。
人類を救う旅の途中で美遊と出会った事、その美遊が神稚児と呼ばれ、人の願いを無差別に叶えられる代償として魂ごと世界に縛られてしまう事。
たった一人妹をたった一人の親友に攫われ、たった一人の後輩を目の前で殺され世界を敵に回した事。七騎の英霊と殺し合う聖杯戦争に無理矢理英霊エミヤと繋げて参加した事。
最後は自分の命を掛け美遊をこの世界に送った事、その後自分が死んでこの世界に転生してきた事。
全てを話した。
「随分波乱万丈な人生やったんな～それに今の話は全部実話やな」
「…貴方がそう言うならそうであろう。早く包帯を巻いたらどうだろうか？」
そう言えば全ての包帯を取る為に上だけ脱いでいたのを忘れていた。
「悪い、すぐにやるよ」
「聞きながらでエエんやけど、自分これからどうするつもりなんや？」
「今からこのファミリアに入れてもらえる様に交渉しようと思っている」

「ほー考えてるんやな。うんうん…そや！自分、ベートと戦ってウチが満足いったらエエで！ウチのファミリアに入れてやるわ！」
　さっきまで黙っていたリヴェリアが口を開いた。
「確かにさっきまでベートはシロウ君の神経を叩き直す云々言っていたが無茶無謀過ぎる！ベートはＬｖ５だぞ！」
「別に【勝て】とは言ってないやろ？」
「しかし…「分かった…引き受けよう。場所は？」
「ま、待ってくれシロウ君、今の君では…」
「大丈夫。俺は美遊の兄だ。妹が頑張ってるんだ。いくらレベルがゼロでもやって見せるさ」
　美遊を幸せにする。その一心で拳を握り、見える右眼で前を見据えた。

単純明快

「大丈夫。俺は美遊の兄だ。妹が頑張ってるんだ。いくらレベルがゼロでもやって見せるさ」
「そしたら勝負は明日にしとこか。もうこんな時間や」
　窓の外をみると、辺りは夕焼けに染まっていた。話してる間に日が暮れたのだ。
「所で自分、寝床は？飯はどないするんや？」
「そこまで考えてなかったな…今日は野宿、かな…飯は抜きで」
「見た目によらずワイルドやな～」
「シロウ君、君って奴は…ハァ・・」
　ため息の後リヴェリアは続けて言った。
「馬鹿なのか？」
　一瞬の沈黙の後、無性にこう言いたくなった。
「なんでさ・・・」
「ママ、ダメやろ？馬鹿はな！ケケケ！」
「えっ、マ、ママ？」
　俺は戸惑っている。いきなりロキがリヴェリアの事をママと言っていたから。

「まったく、誰がママだ。すまないな、混乱しただろう？なに、いつもの事だ。気にすることはない」
（いつもの事なのか？）と頭に疑問符を浮かべながら返事だけした。
「お、おう・・・」
「そや！ミア母さんの所に泊めて貰えばいいんや!!ウチの名前出せばエエからな！後で案内しとくようミユに言っとくわ!!」
「あ、ありがとう、助かる」
「場所はここの屋敷内の修練場でやるわ。時間になったらミユに呼びに行くように言って置くから」
　さっきから何者かの気配がする。
「分かった。で、誰かドアの向こうにいるんだが・・・」

「んー、空気を読んで気配を消していたんだけどまさか気づかれていたなんて…」
ドアを開けながら入ってきたのは小柄な男の子だった。
「サッサと入って来ればいい物を…他の幹部も来るのか？」
「いや、僕だけだ。僕はフィン・ディムナ、このファミリアの団長だ。早速で悪いけど、シロウくん」
リヴェリアと軽く挨拶を交わした後の声のトーンが本気になるのを感じた。
「君は…いや、聞くまでもなかったね。君がここにいる理由なんてものはひとつしかないからね」

間違っていない。だって
「そこに美遊が居るから。もう二度と美遊を手離したくないから。ただ、それだけだ」
理由なんてこれしかない。逆にこれ以外何がある。
今まで黙って聞いていたロキがニヤニヤしながら口を開いた。
「相当なシスコンなんやな～グヘヘ…」
「でも今の言葉だけでも相当な覚悟をしてることは分かったよ」
「そうだな。なら今日はお開きとしよう。ミユが門で待ってる。門までは案内をするから早く行こうか」
「じゃあ、そうするよ」
ふと思った。今俺がこうしていることを切嗣はなんと思うだろうか…
俺は切嗣の意志を継げなかった。なのにこうしてまた新しい道を進もうとしている。
けど、あの時の一緒。もう決めたんだ。（切嗣、見ててくれるかい？）
もう外は薄暗い。美遊と初めて出会った日と同じ景色。少し懐かしみながら俺は最愛の妹が待つ門に向かった。

豊饒の女主人

「なぁ、シロウ君は”英霊の力を行使できる”と言うことで良いのか？」
「ま、そうなるな」
「そうか…さ、ここをまっすぐ行けば門だ」
「あぁ助かった」
　屋敷から出ると、もう辺りは暗くなりかけていた。
「美遊、遅くなってゴメンな」
「大丈夫だよ、お兄ちゃん」
　ここから美遊に案内してもらう場所の名前は、”豊饒の女主人”って言う店。料理が美味しいので冒険者に人気なんだとか。それに加えてもうひとつ理由もあるらしいのだが、美遊は教えてくれなかった。
「なぁ、美遊？」
「どうしたの？お兄ちゃん？」
「…ここに来て、楽しいか？」
「…うん、ファミリアの皆も優しくしてくれるし…でも、ちょっと寂しかったかな…」
　美遊の言う”寂しい”は、その言葉単体で表せる物じゃないはずだ。
　そう思うと、胸の底から熱い感情が湧き上がってくる。
　その湧き上がる感情の意味も込めて、自分の掌を美遊の頭に置き、そっと動かした。
「ッ…」
　急に撫でられてビックリしたのか、顔を赤らめた。
「わ、悪いな…」
「ううん、大丈夫。それと、ありがとね、私をここに連れてきてくれて」
「良いんだ、美遊が楽しいなら。それに、俺にはこれしか出来なかったからな」
「お兄ちゃん…」

美遊は今にも泣きそうな表情だった。それを俺は黙って美遊の頭をなで続けた。
「ここだよ、お兄ちゃん」
「ここか、〝豊饒の女主人〟」
会話を交わす間にとうとう着いた。
まだ開店して間もないようで、〝人が少ないな〟と思った矢先、店から一人出てきた。
「いらっしゃいませ。おやミユさん、こんばんは。今日はどうされました？」
出てきたのは先ほど話したばかりのリヴェリアと同じ種族、エルフの女性だった。
「こんばんは、リューさん。実はミアさんにお願いがあって来ました」
「分かりました、それで、隣にいる方は？」
「初めまして、美遊の兄の衛宮士郎だ。よろしく頼む」
リューに案内された店内には酒を片手に騒ぐ冒険者賑わっていた。
オープンキッチンには大柄な女性が料理を振る舞っていた。
「リュー、悪いけど今は客意外の奴と話してる暇はなくてね、おい、皿洗い位なら出来るだろ？話は全部終わったら聞いてやるよ。早くしな！」
「え、あ、ハイ」
「だそうです、シロウさん。皿洗いをお願いします。その間にミユさんを送ってきます」
「わかった。美遊、気を付けてな」
「うん、お兄ちゃん！」
美遊と別れた後はひたすら増え続ける皿と格闘した。
店にいた客が全員帰って間もなく誰かが入ってきた。
洗い物を全て片付けた後振り向くと、俺は目を見開いた。
〝ここにはいない、もう二度と会うことは無いだろう。〟ずっとそう思っていた。
ただその考えは今の一瞬のうちに砕けた。
そこには一人の少女が立っていた。

「……先、輩？」

再開と再出発

「……先、輩？」

目の前の状況に言葉が出てこなかった。

あの瞬間（とき）桜は兄の意識が置換された人形に殺された。そしてまた会うことが出来てる。

嬉しいはずなのに言葉が出てこない。

暫くの沈黙の後、あの雪の日の様に抱き付いてきた。

「先輩！また…会えましたね」

桜の目には涙が浮かんでいた。

「桜、ゴメンな…」

「先輩が謝る事ではありません」

そんな中「ゴホン！」と大きな咳払い。

咳払いの正体はミアさんだった。

それに周りを見ると、従業員の方々がもの凄く混乱していた。

「全く、うちの店は酒場だ！イチャコラする店じゃないよ！その話は後でにしな！」

「あ、ごめんなさい…ミア母さん」

「すみません…それと、ロキ様からここに泊めて貰うよう言われて来ました。今晩だけ泊めて下さい」

俺はロキ様から貰った恩義を無駄にしないため、頭を下げた。

「はぁ…全く…ロキのところには後で請求書でも送るかな…」

「と言うことは！」

「1泊に見合う皿洗いはして貰ったからね。空き部屋あるから自由に使いな！」

「ありがとうございます！」

なんとか今日の寝泊まりはどうにかなった。

暫くして、部屋にコンコンとノックの音が響いた。

「先輩、入っても大丈夫ですか？」

「良いぞ」

ガチャッとドアが開くと、ワンピース型の寝巻き姿の桜が入ってき

た。
「どうしても…先輩とお話がしたくて…」
「…そうか…ほら、隣に座りなよ」
立たせたままだと可哀想なので、俺が座ってるベッドの隣に座らせた。
「先輩…ごめんなさい…あの時守れなくて…」
桜の口から出たのは、謝罪だった。
「どうして桜が謝る…桜が謝る要素は一つも無いだろ？」
「そうじゃないんです！」
声を張り上げた彼女の眼にはうっすらと涙が浮かんでいた。
「私がやらなきゃいけなかった…なのに…なのに！」
桜は自分を攻め続けている。そんな桜を見てると、体は勝手に動いていた。
桜を抱き締め、耳元でこう言った。

「もう…良いんだ…美遊も俺も桜も今ここで生きてる…だから…もう泣くな」
暫くの俺の腕の中で泣いていた。
泣き止んだ桜は俺の目を見て、「先輩、今夜は…一緒に寝ても良いですか？」なんて言うもんだから逆らえる訳もなく、一緒の布団で一夜を過ごした。
～翌日～
目を覚ますと、桜はもう起きていた。
「先輩、おはようございます！」
「おはよう、桜。昨日はよく眠れたか？」
「お陰さまでぐっすり寝れましたよ」
桜の顔色を見ると、昨日よりも明らかに良かった。
俺は昨日布団の中で一つ決心したことがある。
「なぁ、桜…俺、ここからやり直して行こうと思うんだ」
「なんですか？」

いつしか切嗣が語ったことを思い出した。
ー悪いな、切嗣ー
「俺はこの世界で正義の味方になる。皆を救える正義の味方に」
「ふふっ…先輩らしいですね。頑張ってくださいね」
そう…俺の第二の人生はここからだ！
ロキファミリアに入るための入団審査まではあと6時間ほど。
「美遊、もう少し待っててくれよな」
俺は拳を握った。